

磐梯山噴火からの観光復興：「防災教育と教訓の伝承」の視点から

Destination Reconstruction after the 1888 Eruption of Mt. Bandai: The utilization of a memorial monument for the disaster prevention education

橋本俊哉*
HASHIMOTO, Toshiya

Abstract: The purpose of this paper is to discuss the utilization of the memorial monument of a natural disaster for reconstructing the destination affected by a natural disaster. The results are as follows: 1) Residents who are closely united to their community tend to treasure the memorial monument in their residential area and they also can play the role of the interpreter who convey the reconstruction process to the community's young generations and visitors; 2) Residents of a community that is not strongly united do not appreciate the memorial monument. In the latter case, the monument firstly needs to be utilized as an education resource under the expert's instruction to facilitate the residents' respect for the monument.

Key words: 災害抵抗力 (social disaster control), 磐梯山噴火 (eruption of Mt. Bandai), 災害記念碑 (the memorial monument of natural disaster), 北塩原村 (Kitashiobara Village), 猪苗代町 (Inawashiro Town)

- I 研究の背景と目的
 - II 磐梯山1888年噴火と復興の先駆者たち
 - 1) 1888年の噴火
 - 2) 噴火からの復興に力を注いだ先駆者たち
 - III 長坂での被害とジオパーク学習
 - 1) 長坂の被害
 - 2) 長坂の復興
 - 3) 長坂でのジオパーク学習
 - 4) 考察
 - IV 北塩原村, 猪苗代町の主な災害記念碑
 - 1) 自然災害と災害記念碑
 - 2) 北塩原村裏磐梯地区の主な災害記念碑
 - 3) 猪苗代町の主な災害記念碑
 - 4) 考察
- おわりに

I 研究の背景と目的

自然災害は地域の変容を余儀なくするものであり、そこから速やかに復興・発展する地域と影響が長期化する地域とがある。観光地では、観光自体の再生に差異が表れる。こうした差異が生じる条件を明らかにすることは、とくに自然災害を繰り返してきた日本において、観光地の自然災害からの復興と持続的な発展を考えるうえで欠かせない視点といえよう。

筆者らは、こうした問題意識に沿って「災害に強い観光地」が有する条件に関する調査研究を進めてきた(橋本ら, 2015; 相澤・橋本, 2015; 立教大学観光学部橋本研究室, 2016 etc.)¹⁾。

その取り組みを通じて筆者は、地域社会が有す

* 立教大学観光学部・教授

る災害への耐性の視点を観光地に応用した理論的枠組みとして「災害弾力性」の概念を提示している(橋本, 2016)。この概念は、被害を最小限にとどめるための何らかの社会的・経済的な条件等を備えているかという側面(=「災害抵抗力」と、被災後に速やかに立ち直ることができる条件を有しているかという側面(=「災害回復力」と)によって構成される(広瀬, 2009)。これらを組み合わせたタイプによって、観光地の災害への耐性が特徴づけられるとみなす考え方である。そして、観光地の災害弾力性を高める視点として「防災教育と教訓の伝承」「観光目的、活動メニューの多様性の確保」「リローカレーションの推進」「信頼関係のネットワークの構築」が重要であることを指摘し、理論的な検討を行った。

これらのうち「防災教育と教訓の伝承」については、2011年の東北地方太平洋沖地震(以下「東日本大震災」)の発生を受けて国の政策としても重要性が再認識されたように²⁾、「過去の災害について学び、次の災害に備える」ことは、将来の自然災害の被害を最小限にとどめる(=災害抵抗力を高める)ための重要な視点であると考えられる。そしてそれを実現するためには、住民自らが住み続けている土地の地理的特性や災害の履歴を理解し、過去の災害から学ぶ姿勢をもつことが欠かせない。

こうした観光地の防災教育や教訓の伝承の重要性について考えるにあたり、室崎(2015)の指摘はきわめて示唆に富むものである。室崎は、自然災害からの復興を地域住民が「生きる力」を取り戻すこと」と位置づけ、そこに観光の視点を導入することで、観光が「復興のエンジン」として重要な役割を果たすとしている。そして、復興のエンジンには、精神的・経済的・教育的エンジンの3種類があり、これらを通じて、観光は4つの「生」(生命、生活、生業、生態)を取り戻すことを加速するという(図1)。地域はそれぞれ独自の自然環境・文化環境から構成されている。観光の視点を導入することによって、そこから「地域の宝」を見出し、活用することで、これら3つのエンジンが機能し、復興(4つの「生」に活力を与えること)が加速する。このような復興のプロ

セスを経て3種類のエンジンが力強く機能し、地域が「生きる力」を取り戻すことができるならば、次の災害への「備え」につながるために、結果として災害抵抗力が向上するものと考えられる。

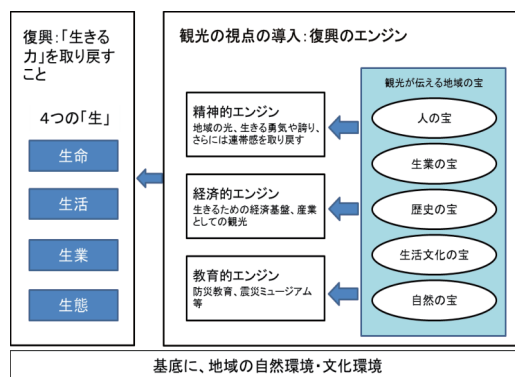


図1 自然災害からの復興への観光の視点の導入
室崎(2015)をもとに作成

観光者は基本的に、訪問地に不慣れな“災害弱者”である(橋本, 2017)。そのため、観光者の存在を前提とした自然災害時の避難・誘導體制づくりを推進しようとしても、住民自らがその土地で過去に発生した災害から学ぶ姿勢をもつことなしには、円滑に進めることはできない。「将来の災害に備える」ような活動も、住民の理解が伴わなければ、実現しえないであろう。

防災教育や教訓の伝承のために、自然災害の記憶を伝える手段は多様である。保存された古文書、絵図、写真等の記録に加え、現地には災害の痕跡を伝える地形や災害遺構、犠牲者の慰霊・供養の塔や碑、災害博物館等がある。その土地に住み続けてきた人びとに伝承されている災害にまつわる口伝、諺、民話等もあり、復興の過程で年中行事となり文化として定着したものもある。さらに、それらの記憶や教訓を伝える語り部の活動も重要である。これらは、住民にとって自然災害からの「生き残る知恵」を伝承するための貴重な「生活文化の宝」である。

本稿は、その中でとくに、自然災害を経験した土地に建立された「慰霊・供養の塔や碑、記念碑等(以下、「災害記念碑」「記念碑」)に着目している。これらは、慰霊や供養、教訓などの目的に

沿ってそれぞれの想いを込めて建てられたものであり、その想いや意義、価値を住民が十分に理解し共有できれば、土地や災害の記憶、そして先人の想いや知恵を後世に伝えてゆくための「物言わぬ語り部」となりえる貴重な「生活文化の宝」である。しかし現実には、住民にとって身近に存在するものでありながら、時間の経過とともに住民の意識から遠ざかってしまう場合が多い。とくに津波や火山災害の記念碑は、気象災害と比べると、災害発生頻度が低いために、どうしても理解が進みにくい³⁾。

このような経緯をふまえ、本研究は、自然災害を契機として建てられた「災害記念碑」を、災害の記憶を後世に伝えてゆく「生活文化の宝」として位置づけ、地域が復興する(=「生きる力」を取り戻す)ために、観光の視点を導入することで、それらを今以上に活用するための示唆を得ることを目的としている。

調査研究対象地は、磐梯山(福島県)山麓の北塩原村裏磐梯地区(当時は桧原村)と猪苗代町である。磐梯山は1888(明治21)年の噴火により、わが国で明治以降最大規模の犠牲者を出した火山災害をもたらした。その際に犠牲者が多かった地域である⁴⁾。もっとも被害の大きかった磐梯山北麓はその後復興・再生し、五色沼をはじめ、現在は磐梯朝日国立公園の中核をなす風光明媚な自然観光地となっている。

本稿では、まず磐梯山の1888年噴火とそこからの復興についての概略について述べた後に、2016~17年度にかけて筆者らが現地を進めてきた調査研究をふまえ、論を進めることとしたい。

II 磐梯山1888年噴火と復興の先駆者たち

1) 1888年の噴火⁵⁾

磐梯山は約70万年前に活動を開始したとされ、これまで何度となく噴火を繰り返してきた。1888年の噴火が起きたのは7月15日の朝のことであった。当日午前7時頃の軽震に続き7時半頃に大きな地震があり、7時45分に磐梯山の峰の一つである小磐梯が山頂付近より破裂した。その後、小磐梯は大きな音を伴って15~20回ほど爆発し、最

後には小磐梯の山体が粉々になり北側の山腹を土砂が流下した。岩屑流(「岩なだれ」という現象である(以下「岩なだれ」)、噴火の度に噴煙が1000~1500メートルほどまで立ち上り、当日は晴天であったが、噴煙の影響で数時間にわたり真っ暗となったという。噴火は当日午後4時頃に収束した。

通常、噴火というと地下のマグマから溶岩が流れ出ることを意味する。しかし、磐梯山の場合は、マグマによって地下水が温められ、それが水蒸気噴火となり、山体を崩壊させて山麓へ流れ下ったものであった。溶岩の噴出がないこの噴火は「磐梯式噴火」と呼ばれている。

この噴火に伴う岩なだれとその影響で河川に発生した泥流(土石流)、そして爆風が、山麓の集落や温泉宿に大きな被害をもたらした。岩なだれの通り道に住む住民は避難する間もなく土砂のみこまれ、泥流による死者(次章参照)も含めて477人が犠牲になった。犠牲者の中で遺体が発見されたのは87人で、400人近くが現在も山の下に眠っていることになる⁶⁾。この噴火により地形は大きく変容し、20世紀に入ってから土石流や斜面倒壊などが繰り返し起きている(図2)。

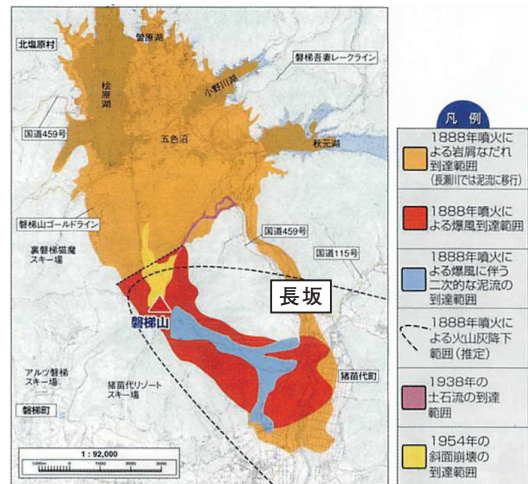


図2 磐梯山1888年噴火とそれ以後の火山災害
出典：『磐梯山火山防災ハンドブック』

この噴火は、直接的被害にとどまらず、社会に広く影響を与えた自然災害でもあった。米地(2006)は、日本帝国を襲った最初の大規模自然

災害であり、この噴火が会津の人びとを「朝敵」から「日本帝国の同胞」に変える契機となったこと、交通面でも鉄道が開通した直後であり⁷⁾、「遠い山国」と意識されていた会津が東京から1日で到達できる場所となった直後の出来事であったこと、通信・報道の変革期で中央紙が報道の成果をあげ寡占化が進んだこと等を挙げている。

2) 噴火からの復興に力を注いだ先駆者たち⁸⁾

1888年の噴火により、磐梯山北麓地帯は赤褐色の土石流と大小の岩石の荒れ地となった。土石流により磐梯山の北側を流れている川はせき止められ、桧原湖や小野川湖、秋元湖、五色沼一帯など、300余りの湖沼群が形成されることになる。

国は、この荒れ果てた国有地を民間に無償で与え、植林成功後に払い下げるとして希望者を募った。その先駆者は、自力で温泉の再興に尽力し、1896（明治29）年に噴火口に「噴火の湯」を開いた湯守、白井徳次である。喜多方出身の白井は噴火地の緑化を願い、桧原村長峯の佐藤栄次郎らと植林し、白井の長男徳八も事業を引き継いでいる。

喜多方の酒造業矢部長吉とその長男善四郎も、1903（明治36）年に五色沼一帯の700haの認可を得て植林していった。しかし志半ばで財産を使い果たし、1910（明治43）年に会津若松の遠藤十次郎（現夢）や呉服店の主、宮森太左衛門らにその権利を譲渡している。

1907（明治40）年に水力発電目当てで裏磐梯を探索し、噴火後の荒涼とした様子を見て植林を決意した遠藤は、裏磐梯に狩猟に来ていた長野県高遠の中村弥六と出会い技術指導を受けた。そしてアカマツ、スギ、ウルシ、モミジ、サクラなどの苗木を買いつけた遠藤は、1919（大正8）年に81,350町歩の植林を完成させた。中村に恩を感じた遠藤は中村に土地を贈ろうとしたものの中村は固辞したため、せめてその名を残すべく、現在の裏磐梯高原ホテル前庭の沼を「弥六沼」と命名している。

遠藤は1930（昭和5）年に宮森らとともに「磐梯施業森林組合」を設立し、造園を継続しながら道路整備にも尽力した。宮森は温泉開発にも力を

注ぎ、裏磐梯高原ホテルの前身となる施設を建設している。彼らは裏磐梯を「東洋のスイス」にすることを夢見て自然公園化を目指した先駆者であった。彼らの努力が実り、裏磐梯周辺は1950（昭和25）年、朝日連峰とともに磐梯朝日国立公園の指定を受けた。とくに風光明媚な五色沼周辺地域は、同国立公園の中核として、東北地方有数の自然観光地としての歩みを進めることになる。

このように、裏磐梯地区の復興がなされたのは、噴火後の荒れ果てた地の再生に取り組んだ先人たちの努力と、さまざまな彩りに変化する五色沼などの湖沼群を生みだした自然の造形力によるものである。なお、磐梯山地域は2011（平成23）年に「磐梯山ジオパーク」として、日本ジオパークに選定されている⁹⁾。

Ⅲ 長坂での被害とジオパーク学習

1) 長坂の被害

磐梯山噴火の犠牲者は、主に磐梯山北麓と東麓地域に集中している。北麓は水蒸気爆発による岩なだれが桧原村を埋めた直接被害である。もう一つは東麓を流れる長瀬川を、山体崩壊後の土石流が流れ下った際の被害である。北麓の岩なだれでは275名、東麓の土石流では114名が犠牲となっている。

東麓の土石流にのまれてもっとも大きな被害を受けたのが、長瀬川沿いにある長坂集落（猪苗代町、図2右下）で、死者は93名であった¹⁰⁾。犠牲者に集落外の者14名が含まれていたのは、長坂は養蚕が盛んで、ちょうど養蚕の最盛期であり、近隣集落からの手伝い者が多かったためである。

長坂の被害の特徴としては、住民の過半数が犠牲になったという人的被害の大きさに対し、建物の被害が25戸のうち3戸と少なかったことである。住民たちは、爆音や大きな振動が起きた西側の磐梯山とは反対の、東側にある長瀬川方面に逃げた。噴煙により真っ暗になった中、住民たちを襲ったのは、岩なだれが磐梯山北麓に流れた後に、長瀬川を洪水のように下った土石流であった。

被災後は、長坂の若者たちは老人や病人を見捨てて逃げた親不孝者・身勝手な者たちで、彼らは

その報いで死に尽くしたというような「噂」が、記事や学術雑誌でさえも取り上げられ、住民を苦しめてきた（「長坂の悲劇」と称されている）。これに対し米地（2006）は、長坂の各家族の生存者・犠牲者数を詳細に分析し、これらは誤解であると反論している。

2) 長坂の復興

長坂では上記のような噂に負けることなく、60余名の生存者が相互協力をしつつ再興を進めてきた。

2017年7月に長坂の住民11名を対象とした聞き取り調査を実施した¹¹⁾。現在、同集落の住民は主として噴火時から4代目を中心とする。彼ら・彼女らが先代、先々代から聞き伝えたことや現在の暮らしについて何うことができた主な内容は表1の通りである。

このように長坂は、被災後に生存者同士が一丸となって復興に取り組んできた、住民相互のつながりが強固な集落であることがわかる。

3) 長坂でのジオパーク学習

集落の中心にある農道の四つ角に「長坂部落殉難乃精霊碑」がある。これは1925（大正14）年、噴火当時の生存者磯谷庄吾らが施主として建立したものを、碑文が風化して読みにくくなったために1989（平成元）年に掘り直したものである¹²⁾。その横には有縁無縁の犠牲者のために「供養塔」が建てられている。長坂の老人クラブは毎年記念碑を清掃しお参りし、先祖の冥福を祈り語り伝えており、住民はそれが大変意義あることであると認識している（長坂ふるさと資源保存会、2017）。これらの碑の横には現在、「磐梯山噴火と長坂の悲劇」とタイトルがつけられた磐梯山ジオパークの解説板が設置されている。

表1 長坂の住民からの主な聞き取り調査結果

噴火時についての聞き伝え	<ul style="list-style-type: none"> ・「水蒸気爆発」であり「噴火」という表現はふさわしくない ・当時の人口は25戸149人、うち86名が泥流にのまれ犠牲になった ・長坂の家屋は3戸が泥流により流された ・噴火後しばらく（1時間余）の間は真暗闇になった ・「若者がお年寄りや病人を置き去りにして逃げた」という噂が広まったがそれは誤りで、若者は外で働いていて犠牲になった ・草取りの時期だったので住民の多くは田にいて、田の中を這って畦にたどり着いた
噴火後についての聞き伝え	<ul style="list-style-type: none"> ・噴火前はとても良い土地だったが、雨が降るたびに洪水が起きるようになってしまった ・部落の共有地をすべて開放して田を作った ・ブラジルに集団で移民しようという案も出たが「生存者同士、長坂で結束して生きよう」ということになった ・噴火が原因で他へ移住した住民はいない
現在の暮らし	<ul style="list-style-type: none"> ・近年遺跡が発掘され、この地には縄文時代から住んでいたことがわかった ・元の生活に戻るのに100年かかった ・現在長坂には20戸86名が暮らしている ・長坂には結の精神＝助け合う、協力しあうことが自然に身につけている ・先人が眠っている場所だから守っていかねばという思いで、みんなでここに残っている ・「皆で生きていく」という教えを受け継いでいく ・「青空学校」というお年寄りの方々が集う憩いの場があり、そこに集まるのを楽しみにしている ・毎年11月第一日曜日に「新そば祭り」が行われ、多くの人が訪れて賑わう

猪苗代町・北塩原村では、毎年小中学校数校が、「ジオパーク学習」の一環としてフィールド学習を実施しており、これらの災害記念碑のある地点は、その立ち寄り地となっている。そのうちの1校に、長坂近くに立地する猪苗代町立吾妻中学校がある。同校は2012年度より毎年1年生が「ジオパーク学習」を行っている。2017年度も2時間の事前学習（座学）のあと、9月に2日間をかけて磐梯山周辺のフィールド学習を行っており、1日

目に磐梯山の噴火口を訪れた後、長坂を訪ねている。

同校のフィールド学習では、長坂は20分をかけた立ち寄り地となっており、生徒たちは災害記念碑の前で専門家（磐梯山噴火記念館館長）より説明を受けた（図3）。内容は、まず体験者の話を生徒が朗読し、続いてなぜこの地で多くの犠牲者が出たのかについての解説、さらに地図や被災後の写真を用いた解説や「長坂の悲劇」に関する話などであった。

なお、吾妻中では毎年、フィールド学習後に生徒たち同士が話し合い事後学習を行い、その成果を11月の文化祭で発表している。



図3 長坂でのジオパーク学習の様子
(2017年9月)

4) 考察

長坂は、1888年の「噴火」により住民の過半数が犠牲となり、しかも事実とは異なる噂が広まったことで苦しめられてきた。その子孫となる現在の住民たちからは、被災後、住民が結束して再興に取り組んできた経緯と、現在も助け合い協力し合いながら生活している様子について何うことができた。

今回紹介した中学校のフィールド学習では、磐梯山噴火記念館所属の専門家が案内し、生徒に噴火当時の長坂の様子や「長坂の悲劇」について解説していた。長坂の近くに暮らす生徒たちにとって、実際に被災履歴のある現場に身を置いて専門家の話を聴くことは、地元の地理的特徴や歴史について改めて多くを学ぶ貴重な機会となったはずである。

もしこの機会に、専門家とともに、長坂の住民が語り部となって生徒たちを迎えることができれば、今以上に説得力のある防災学習の機会となることだろう。そうすることで、より一層生徒たちの地元への理解は進み、地域の防災力の底辺が広がることにつながるものと考えられる。

さらに、観光者が長坂住民の語り部の話を聴く機会へと展開してゆくことも検討に値する。裏磐梯の美しい風景という自然の“恵み”が1888年「噴火」あつてのものであることや、噴火の被害を経験し磐梯山の山麓に暮らし続けている話を直接住民から聴く機会を設ければ、とくに繰り返し磐梯山を訪ねているような観光者には、磐梯山についての理解の裾野を広げる、きわめて興味深い体験として歓迎されるであろう。

長坂には、「長坂の悲劇」と呼ばれる誤解を乗り越え、住民が結束して再興に取り組んできた歴史があり、それらを「外の人たちにも知ってほしい」と希望する住民がいる¹³⁾。長坂住民が語り部として活動できる仕組みを設けることは、住民が高齢化するなかで、代々自分たちが長坂で暮らしてきた証を伝承する機会を社会化するという意味で重要である。それはまた、彼ら自身の生き甲斐にもつながるであろう。ここに、伝承を外部に発信する手段として観光の視点を導入することが有意義と考えられる大きな理由がある。

IV 北塩原村、猪苗代町の主な災害記念碑

すでに紹介した通り、磐梯山の1888年噴火で人的被害が大きかったのは桧原村（現在の北塩原村裏磐梯地区）と猪苗代町であった。ここでは、自然災害関連の記念碑の概要について述べたうえで、筆者らによる現地調査ならびに関連文献をもとに、両町村に建立されている（長坂以外の）主な記念碑と、その地の被災状況等について紹介する。

1) 自然災害と災害記念碑

災害で犠牲者が出た場合に供養の碑を建てる慣習は古くからみられる。現在もっとも古い災害記念碑と考えられているのは、1361（正平16）年

南海地震津波で1700戸が流出したときの徳島の津波碑で、近世になると、城郭普請などの技術を有した石工によって、地震・噴火・津波に加え、飢饉や風水害などの犠牲者を供養する碑が多く建てられるようになったという（北原，2012）。多くの場合は3周忌・7周忌など周年忌に建てられ、なかには50周年・100周年などもみられる。津波来襲の歴史をもつ場所では、死者の供養に限らずに警句を刻んだり、津波到達地点を示すものもあるなど、それ自体が防災の役割を果たすものもある。

北原（2014）は、東北三県における津波碑について、悉皆調査をもとに建立の意図や人びとの復興への取り組みを碑面の分析から詳細に明らかにした調査を紹介している。川島（2016）は、津波碑を通して、人びとが自然災害に対して抱いた思いや、どう伝承しようとしたのかについて分析し、武村（2017）は、関東大震災からの復興百年を、横浜を中心とした地域の慰霊碑・記念碑の調査をもとに読み解いた。森（2014）は、なぜ過去の教訓が活かさずこなかったのかという問題意識のもと、全国の地震・津波にまつわる石碑を踏査した結果を紹介している。

火山災害に関しては、1783（天明3）年の浅間山噴火（萩原，1982；村井，2013）や、1914（大正3）年の桜島大正噴火（岩松，2014）による災害記念碑（供養碑）についての調査等がある。

2) 北塩原村裏磐梯地区の主な災害記念碑

①長峯（雄子沢）

爆発した小磐梯山から北麓約4kmに位置した雄子沢集落は、全20戸が水蒸気爆発による岩なだれの直撃を受けて数分後に泥流に埋没し、105人が亡くなった。生存者は出稼ぎや魚釣りで噴火当時不在にした者のみで、帰宅したもの彼らの住まいがあったであろう地にその形跡は皆無で、桧原湖西岸にある現在の長峯（雄子沢）集落（行政区）に移転している。

集落の墓地の入り口には、泥流に埋没した元雄子沢集落での犠牲者を供養する碑（図4）が、1894（明治27）年に建立されている。



図4 磐梯山噴火非命供養碑（長峯）

②桧原

桧原集落は小磐梯山の北約12kmに位置しており、岩なだれの土砂の到達は9km地点までであったために、直接の被害はなかった。犠牲者は、土砂の届いた範囲内での農作業中に岩なだれに遭遇した農民家族10名であった。

桧原湖はその時の土石流によって谷川がせき止められてできた細長い形の湖で、南北約18km、東西約1kmの大きさで、噴火によってできた300余りの湖沼群のうち、最大のものである。米沢街道の宿場町の面影を残した当時の桧原集落は、桧原湖ができたことにより水没したため、生存者は高台（現在の桧原湖畔）に移転した。

この現在の桧原集落には、犠牲者の墓と、100周年の1988（昭和63）年に建てられた2つの碑が並んで建てられている（図5）。100周年記念碑の裏面には、犠牲者の霊を供養するとともに、磐梯高原のますますの発展を願う旨の刻字がなされている。



図5 「磐梯山破裂罹災死歿之墓」(左)と「磐梯山噴火100周年記念供養碑」(右) (松原)

③小野川

小野川集落は小磐梯山の東北東約8kmに位置し、山体崩壊の土砂に集落は埋まっていなかったが、噴火後に小野川湖ができたことによる水没によって12戸全戸が移転を余儀なくされた。犠牲者は4名であった。

この供養観音は、噴火100年にあたる1988(昭和63)年に、小野川湖に沈んだ犠牲者を供養するために磐梯山方面を望む湖畔に建てられたもので、側面には建立時に寄進した関係企業や移住者名が列記されている(図6)。



図6 小野川湖供養観音

④遠藤現夢の墓(図7)

裏磐梯の緑化に尽力した遠藤十次郎(現夢)は、山体崩壊で崩れてきた大きな岩を生前に墓石に選び、その隣に「磐梯噴火災死之人碑」を建立し犠牲者を弔った。

墓は五色沼の柳沼近くにあり、五色沼遊歩道か

ら誘導表示のある脇道を入り5分程度歩いた場所にある(図7)。この地には、現夢の二十七回忌にあたる1961(昭和36)年に、嫡男義之助が建てた誌碑も建てられている。



図7 遠藤現夢の墓

3) 猪苗代町の主な災害記念碑

前章で紹介した長坂集落以外の、磐梯山噴火関係の主な記念碑には以下のものがある。

①西圓寺

西圓寺では、引き取り手のない姓名不詳の52名の犠牲者の遺体を引き取り合同で埋葬供養し、噴火2週間後の7月30日に供養祭を行った。この供養塔は、天皇陛下はじめ全国からの義捐金で建立したものである(図8)。



図8 横死者供養塔(西圓寺)

②西勝寺

高さ2.43mの安山岩の大きな碑である（図9）。これは噴火の年の9月に、七日町の玉川正興の妻清子が、親族の罹災と犠牲者を悼み、巨費を投じて建立したものである。



図9 招魂の碑（西勝寺）

③土津神社参道

土津（はにつ）神社参道沿いに建つこの記念碑は、噴火から4年後の1892（明治25）年、県が全国からの義捐金に応え、知事が各所に声かけをし、犠牲者の冥福を祈るために建てたものである（図10）。これは磐梯山の噴火関連で建立されている記念碑の中で一番大きいもので、碑文には噴火の被害状況、被災者数、義捐金などが記録されている。



図10 磐梯山災死者招魂碑（土津神社参道）

4) 考察

1888年噴火の犠牲者に対し、北塩原村では毎年7月に開催される「裏磐梯火の山祭り」の最初に花火をあげて慰霊を行い、猪苗代町では毎年噴火の起きた7月15日に、西圓寺と西勝寺が交互に慰霊祭を行っている。これらは、災害の記憶を風化させずに、鎮魂の想いを年に一度更新し伝承してゆくための仕組みとみなすことができる。

災害記念碑は、このような伝承の仕組みにおいて重要な役割を果たしうる。「年に一度」という間隔を置くことなしに、住民・訪問者の双方に対して、記憶や鎮魂の想いを伝える手がかりとなるからである。被災当時の痕跡が残されていないと人びとの記憶は薄れてしまうが、何らかの形で残されていれば、現場で当時の様子を想像しやすい（佐藤、2016）。前章3）で紹介した長坂の老人クラブの活動にしても、記念碑があるからこそ、それを繰り返し掃除することで先祖とのつながりが意識でき、語り伝えることの意義を認識し続けられるのであろう。

このように記念碑が住民に大切にされている集落であれば、訪問者が学ぶ仕組みを導入することは比較的容易であろう。そうなれば、訪問者という“外の眼”を通して住民自らが記念碑を建立した先人の想いを再認識できるので、記念碑は住民たちに「生活文化の宝」と認識されてさらに磨かれ、今以上に大切にされることにつながる。そうなれば、記念碑を建立した先人の想いが受け継がれてゆくことになる。

しかしながら、長坂のように記念碑を大切にすることの意義が住民に共有されている集落は限られている。記念碑が住民の意識から遠ざかってしまっている場合に、その価値を住民に再認識してもらうためにはどうすればよいか。まずは住民と記念碑との心理的距離を近づけるべく、専門家や研究者の指導のもとで、長坂のように地元の児童・生徒のフィールド学習の場として活用することを通して、なぜその記念碑がそこに建立されたのか、先人の想いを住民に再認識してもらうことは、ひとつの有効な手だてとなる。

そのための取り組みときわめて親和性が高いと考えられるのが、ジオパークの活動である。ジオ

パークには、地域の保全だけではなく、教育や観光を通して地域が持続可能な活動を続けることが求められている。どんなにすばらしい大地をもっていても、それを守る人がいなければ保全することは難しい。地域の大地について学ぶジオパーク学習には、その自然災害履歴も含めて学ぶ必要があるために、防災学習的な側面も多分に有しているからである（佐藤，2016）。

まずはそのような“外の眼”を用いた活動を導入することが、住民に記念碑の存在を意識させることになる。それにより住民自身が、建立した先人の想いと建てられた理由となった災害履歴について、理解しようと思うようになれば、専門家から学ぶなどにより、住民が記念碑を「生活文化の宝」と認識することにつながっていくだろう。そうなれば次の段階として、長坂で考えられるような観光の視点の導入も可能となり、観光が復興の「教育的エンジン」として、自然災害からの復興を推進できるものと考えられる。

おわりに

今回紹介した磐梯山エリアにおいても、現段階では、長坂を除いては、建立時の想いが住民や訪問者に十分に伝えられているとはいえない。住民や訪問者と災害記念碑を心理的に近づけるために、磐梯山噴火にまつわる記念碑を紹介する親しみやすいマップを作成することなどは、ひとつの有効な手だてと考えられる。

防災教育や教訓の伝承は、住民の意識に訴えることによって次の災害への備えの素地となり、地域の防災力のすそ野を広げ、結果として地域の災害抵抗力の向上につながる重要な視点であり、こうした視点なくして観光の「教育的エンジン」も有効に機能しえないだろう。この地域のジオツアー学習に参加した生徒の中から、ゆくゆくは地元の災害の履歴についても解説できる専門家やガイドが育つことを期待したい。

付記

本調査は、文部科学省科学研究費基盤研究B(16H03334)「自然災害に対する観光地の「災害弾力性」に関する評価指標の開発」(研究代表者：橋本俊哉)により実施されたものである。

注

- 1) 筆者らは、2013年以来、本稿で取り上げている磐梯山地域において、東日本大震災からの観光復興の現地調査に取り組んできている。構成員は立教大学観光学部橋本研究室・文教大学国際学部海洋研究室の教員・学生による共同プロジェクトチームである。現地の主な調査パートナーは裏磐梯エコツーリズム協会で、2016年からは磐梯山噴火記念館、2017年度からは磐梯山ジオパーク協議会とも協力しながら進めている。
- 2) 防災教育を通じて後世に教訓を伝えていくことの重要性は、2012年6月に改正された災害対策基本法に、災害教訓を伝承することが住民の責務として明記されるとともに、国・地方公共団体、民間事業者を含めた各防災機関において防災教育を行うことが努力義務化された（第7条、第46条、第47条2項等）。
- 3) 関東大震災を経験した寺田寅彦は、津波碑について「はじめは人目に付きやすい処に立ててあるのが、道路改修、市区改正等の行われる度にあちらこちらと移されて、おしまいにはどこの山蔭の竹藪の中に埋もれないとも限らない…その碑石が八重葎に埋もれた頃に、時分はよしと次の津浪がそろそろ準備されるのであろう」（『鉄塔』1933年5月）と指摘している（寺田，2011）。また糸原（2014）は、今回の東日本大震災において、多くの津波碑が健在であったことから、その意味では先人の知恵が生かされたとしながらも、年配の方で津波防災に関心をもち活動をされてきた方を除くと、津波碑の存在に気づかなかった、知らなかったという住民が相当程度存在したことを指摘している。
- 4) 桧原村では人口653人のうち234人（35.8%）が、猪苗代町では4858人のうちの178人（3.7%）が犠牲になっている（磐梯山噴火百周年記念事業協議会編，1988）。
- 5) 本節の記述は主に佐藤（2001）、米地（2006）を参考にしている。
- 6) 犠牲者数は資料により若干異なる。以下、断りのない限り『北塩原村史通史編』に紹介されている内閣府「1988磐梯山噴火報告書」をもとにしている。
- 7) 噴火前年の1887（明治20）年夏に、日本鉄道奥州線（現JR東北本線）白河-郡山間が、同年の暮れに郡山-塩竈間が、それぞれ開通したばかりであった。
- 8) この節の記述は、主に阿部（2001）、福島民報社（2001）を参考にしている。
- 9) 「大地の公園」を意味するジオパークは、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が認定する世界ジオパークと、日本ジオパーク委員会が認定する日本版がある。2017年9月現在、日本には洞爺湖有珠山から阿蘇まで世界

ジオパークが8カ所、日本ジオパークには磐梯山を含む43地域が認定されている。

磐梯山ジオパークは、山体崩壊と岩なだれが繰り返し起こりふもとに多くの湖沼を誕生させたことが特徴で、とくに1888年の噴火は、世界で初めて山体崩壊と岩なだれに関する科学的な調査と記録がなされた点で高い価値をもつこと、この地に生きる人々は、大昔から火山災害の恐ろしさと火山がもたらす恵みの両方を受けとめ、生活を営み歴史を展開してきたことが指摘されている（磐梯山ジオパーク協議会「磐梯山ジオパークお宝ガイド」）。

- 10) 長坂の被害の実態については、過去の研究を詳細に検討し、信頼できる公式な郡報告（「被害調査儀ニ付上申」、福島県庁文書）を紹介している米地（2006）による。
- 11) 男性4名、女性7名。年齢は未確認であるものの、ほぼすべてが70～80代と推察される方々であった。
- 12) 米地（2006）は、1989年にこの碑が掘り直された際、家屋倒壊被害が実際よりも多かった内容に碑文が改ざんされていることを紹介し、それが意図的であったか否かに限らず、結果として改ざんしたことになったのは、噴火後の心ない報道が一世にわたって地元の人びとを苦しめてきたことによるものであると指摘している。
- 13) 長坂地区での聞き取り調査は、17年4月の現地の調査パートナーとの調査打ち合わせの中で、長坂には「外の人にも（真実を）知ってほしい」と考えている住民がいると聞いたことが契機となって実施されたものである。

文 献

- 阿部久仁於 2001 磐梯山噴火からの復興 国立公園指定五十周年記念誌編纂実行委員会（編）裏磐梯 北塩原村を考える会 54-61.
- 相澤孝文・橋本俊哉 2015 福島県北塩原村における風評被害に関する住民意識の類型化—観光の風評被害克服に向けて— 日本観光研究学会全国大会学術論文集, 30, 325-328.
- 磐梯山噴火百周年記念事業協議会編 1988 磐梯山噴火百周年記念誌 ぎょうせい
- 福島民報社 2001 磐梯山—黄金の山・湖・里 福島民報社
- 萩原 進 1982 天明三年浅間山噴火史 鎌原観音堂奉仕会

橋本俊哉・海津ゆりえ・相澤孝文 2015 東日本大震災における観光の風評被害に関する研究—福島県北塩原村の「風評手控え行動」の分析を通して— 立教大学観光学部紀要, 17, 3-12.

橋本俊哉 2016 観光地の「災害弾力性」試論 立教大学観光学部紀要, 18, 90-98.

橋本俊哉 2017 ハワイ州ヒロにみる津波防災への取り組み—海浜観光地の津波防災力向上に向けた示唆— 立教大学観光学部紀要, 19, 5-13.

広瀬弘忠 2007 災害防衛論 集英社

岩松 暉 2014 記念碑が伝える桜島大正噴火 高橋和雄編著 災害伝承 111-142.

川島秀一 2016 津波碑から読む災害観—一人びとは津浪をどのように捉えてきたのか 橋本裕之・林勲男編 災害文化の継承と創造 臨川書店 44-65.

北原糸子 2012 災害記念碑 北原糸子・木村玲欧・松浦律子編 日本歴史災害事典 吉川弘文館 764.

北原糸子 2014 津波災害と近代日本 吉川弘文館

北塩原村史編さん委員会 2007 北塩原村史 通史編 北塩原村

森 隆 2014 石碑は語る 保険毎日新聞社

村井 勇 2013 浅間山—天仁・天明の大噴火 長野原町営鬼押出し浅間園 浅間火山博物館

室崎益輝 2015 復興から見た観光（招待講演）第4回 CATS観光創造研究会 北海道大学観光学高等研究センター

長坂ふるさと資源保存会 2017 いつまでも残したい『長坂の風景』

立教大学観光学部橋本研究室 2016 観光資源の持続的活用による風評被害の克服に関する研究—福島県北塩原村を事例として

佐藤 公 2001 磐梯山1888年の噴火 国立公園指定五十周年記念誌編纂実行委員会（編）裏磐梯 北塩原村を考える会 46-49.

佐藤 公 2016 科学博物館は自然災害をどのように伝えていくべきか 博物館研究, 580, 18-21.

武村雅之 2017 復興百年誌—石碑が語る関東大震災 鹿島出版会

寺田寅彦 2011 津浪と人間 天災と国防 講談社学術文庫 136-145.

米地文夫 2006 磐梯山爆発 古今書院